朝日新聞 1969年7月19日（土）夕刊

# 月を係争に巻込むな

## くだらぬ到着競争

### 宇宙の堕落は許されぬ

バートランド・ラッセル

私たちの年代の者は子どものころ、ジュール・ベルヌによって月旅行の考えに親しむようになった。彼はすばらしい科学小説を書き、冒険心に富んだ若者たちの想像力を刺激した。「月世界旅行」という彼の小説を読んだときのスリルを私はいまでも生々とおぼえている。しかし、ジュール・ベルヌの空想科学小説を楽しんで読んだ人たちが生きている間に実際の月旅行が可能になるとは、私はほとんど思ってもいなかった。他の若い読者も同じだと思う。だが、それは現実に起こっていることなのだ。このような冒険は考えただけでも胸をワクワクさせる。とくにまだ若い人たちにとってはそうだ。しかし、もう若くはない人たちは、月征服が本当に人間の運命を改善するのかという疑惑やとまどいに悩まされている。私は、独断的な結論に達しようとすることなく、双方の意見を聞いたうえで、公平に述べてみよう。

**一番早かった自転車**

まず、過去の技術発展史の中でこの問題を見てみよう。私が子どものころ、電灯は発明されたばかりで、電話はまだめずらしいものと考えられていた。道路上で一番早いものは自転車だった。自転車は通行人に危険を与え、馬をこわがらせるのではないかと心配されていた。私が初めて自動車を見たのは大人になってからで、飛行機を初めて見たのは四十歳近くになったときだった。第一次大戦中、ドイツが射程百十キロの大砲をつくったときにはみんなが驚いた。まだ若い人たちは、現在日常生活の中で当り前のものとされているものの中でいかに多くのものがごく最近発明されたものであるか容易には理解できない。

われわれの時代がかつてない進歩をとげつつあるのは新しい発明の分野だけではない。冒険の分野でもそうである。私が若かったころ、アフリカの大部分はまだ探検されたことがなく、南北両極は到達できぬところとなっていた。エベレストは長い間、探検家にとって最後の挑戦の場所となっていたが、ついに熱烈な冒険心に降伏した。冒険を好む気持は、文明がはじまって以来、常に人類の明確な特質だった。そして、それは冒険心に対して普通与えられるあらゆる称賛に値する特質だと思う。恐怖のために冒険心が衰えたり、窒息したりするのを私は見たくない。このような一般的な考慮から、科学的可能性の範囲内にはいりはじめたこれら地球外への旅行を人は称賛する。南北両極やエベレスト征服は一般に称賛に値すると考えられていた。疑いもなくまさしくそうである。われわれはまた、最近はじまったが、まだ大部分が未知のまま残っている海底探検や上空探検を称賛する。月旅行の冒険を初めて行う人たちは、より大きな度合いで、これと同じ称賛に値するだろう。しかし、人類が月に到達したとき、勇気と技術に対する称賛以上の何ものかが得られるかどうかは疑問だと思う。

## 奇妙なソ連の小説

まだ疑問のまま残っている第一の問題は、人間が月面で生活できるのか、数日後には地球に戻らねばならないのかどうかということである。月には大気がない。あってもきわめて希薄なものだ。水もなければ、植物もない。従って月に着陸する人たちはまず呼吸する空気をつくり、空気がすぐ逃げないような装置の中にはいらなければならないだろう。彼らは滞在中の生活に必要な食糧と水を持っていかねばならないだろう。こうした理由から、月はエベレストの頂上より住みにくいだろう。いずれにせよ、これが長い年月にわたる月の状況であろう。

しかし、月の物理的状況は科学的操作によってだんだん変えられると思っている人たちもある。私は、ソ連政府が若い人たちの教材として適当だと考えている、非常にまじめな科学的なフィクションを織込んだ奇妙なソ連の作品を読んだことがある。それは次のように述べていた。月の岩石をガスに変えるような化学物質がやがて発見され、次第に大気として作用するものがつくられるだろう。いったん大気がつくられれば、鉱物から抽出した水素と酸素で水をつくることができる。そのときには、原始的な生物が新たにつくられたプールの中で生存でき、生物学者たちがこれらの生物を徐々に進化させるかもしれない。

不可能だというのはやめよう。百年前にさえまったく人間の力の範囲外とみられていた多くのことがこれまでに達成されてきた。今後、何世紀かの間に科学がなしとげることに、今から不変の限界を設けることは早すぎるだろう。

しかし、とはいっても、非常に精巧かつ高価な装置を持って短期間滞在するのを除いて、近い将来、月で生活できる見込みは確かにない。もし可能になったとしても、月が人口問題解決の糸口を提供したり、不人気な亡命者たちの避難地となるには、非常に長い歳月がかかるだろう。

## 見当ちがいの心配

最初、多くの科学者は月へロケットを発射するのを遅らせるよう望んでいた。その理由は二つあった。これらの科学者によると、月面はホコリにおおわれており、ロケットを打込めばホコリの層がメチャクチャになってしまう。だが、そのままになっていれば、月は宇宙の過去の歴史を調べる貴重なデータを提供するだろう。また、もし月に希薄な大気が存在していたら、ロケットの噴射でこの大気を汚染することになるだろう、というのである。現在、各国政府が、公害によってガンや精神病をつくりだしていることを知りながら、大気や土壌、飲料水、食品などを故意に汚染することに従事している事実を考えると、私は架空の月の大気やほこりに対するこのような心配をおかしく思わざるを得ない。

月に対しては細心な注意を払いながら、生命ある地球では勝手な破壊をおこなっているのは、どうかしているというのが私の気持ちだ。こういうと、私は、愛国心が欠けているのかもしれない。本当の愛国者というものは、苦しむ敵の数の方が多ければ、多くの自国民がバカになっても意に介しないものだ。（注：赤字部分は英語原文に見当たらず。総じてこの段落は原文との対応が不完全。おそらくversionが異なるものと推察される。吉田英生）

不幸にして、月到着計画は、この容赦ない競争心に毒されている。月到着計画は、なにものにもとらわれない科学の精神で考えられたのもではなく、また、人類の利益を増すためでもなかった。逆に、相対立する大国間の競争の一手段とみられて来た。大事なことは月に到着することではなくて、自分たちの手で（どちら側であれ）、他国より早く到着することだ、と考えられて来た。

これは全くくだらないことであり、健全な人々に、月計画の全事業の価値を認めさせなくした。人間というものは、長所もあれば欠点もある。欠点が宇宙に広がり、長い旅路の間に増大したにくしみの心を持った粗野な巡礼者の手で、われわれの狂気が、まず月に、ついで火星、金星、そして恐らく後日は、さらに遠い宇宙のはてにまで持込まれ、また、こうしたすべてのことが、われわれのおろかな小ざかしさの結果だとするならば、私は手放しで未来に期待することはできない。

## どちらが人間的か

全人類が悔い改めぬ限り、これこそ人間が生存し続けた場合、いずれも直面せねばならぬ事態である。人間は月に着陸しただけでは満足せず、月を住めるところにしようとするだろう。米ソ両国ともほとんど同時に月に上陸するだろう。しかも双方とも水爆を完備し、相手を絶滅することに余念もないのだ。こうなると地上で敵に毒を盛り安楽死を遂げさせた方がいっそ安上りで人間的かもしれない。

## 奪われる思考時間

宇宙旅行はそれ自体が地上の争いを緩和するかもしれないとみる人もいる。が私はこういう考え方にどんな根拠があるのか分らない。西半球が発見される前も欧州はたえずもめていた。発見後、旧世界のならいだった戦争は“新世界”に持込まれた。

これまでのやり方を改めず、われわれが愚かな帝国を宇宙にまで広げるなら、これまでと同じことが起るだろう。

宇宙旅行の新しい可能性が、人間の知恵をます何かの足しになるだろうと考える根拠はないのだ。逆に、空の旅がそうだったように、宇宙旅行は人間に動き回ることのみに時間を費やさせ、ものを考える時間をそれだけ奪うことになろう。現に大国の外相たちは大国同士の訪問のほかにも、小国にも影響を与えようとして世界中の国を飛回るのに忙しく、その結果、彼らは、外交政策が一片の良識をもつのに必要な基本的知識さえ身につけるひまがなくなった。騒々しい活動がますます理性的な思慮の場を占領して行くだろう。月に旅行する外相は、公務を見事果たしたという気持でいっぱいで、地上から持ちこんだばかげた信念を臆面（おくめん）もなく持ち続けるだろう。

## 宇宙レベルへ向上

人間が啓発されるのは、騒々しさによってではない。スピノザはハーグだけで満足した。ドイツ人最高の哲人とされるカントは、ケーニヒスベルクから十マイルも離れたことはなかった。

私としては、われわれが、かまびすしい、そして救いようのない紛争を他の場所に広げないうちに、地上の問題の処理にもう少し知恵が示されるのをみたいものだ。火星と金星はきわめて効果的に輝き、夜空の景観である。もし、この二つの惑星のうちどっちを州にすべきか、とか、一方の星では共和党が強く、他の星では民主党が有力だといった討論が議会でたたかわされるようなことになったら、私は、これらの星の輝きから、もはや喜びを見出さないだろう。われわれは宇宙的なレベルにまで、向上しなければならぬのであって、宇宙をわれわれの無益な争いのレベルにまで引下げるべきではない。

征服者はほとんど常に過酷であったが、若干の例外はある。その例外のうち最も著しいものはギリシャにおけるローマ人であった。だが一般的にいって、征服する側に回った人たちは、より高度な文明に対して無関心である場合が多い。メキシコやペルーを征服したスペイン人は、ただ大量の金（きん）を捜し求めただけである。彼らがすばらしい二大文明をむとんちゃくに破壊し去ったため、後世の歴史家や考古学者がその再発見に骨折ることになった。それに似たような文明が、月に存在すると考えているわけではない。だが私は宇宙塵（じん）に関心を持っている科学者諸君についていささか軽蔑（べつ）的ないい方をしてきたかもしれないが、それでもなお私は、月を、われわれが、宇宙的な無遠慮さで誇大に呼んでいる「超大国」なるものの争いに巻込もうとする人々の考えよりも、塵に関心を持つ学者の見解の方を尊敬する。

## 尊敬と無慈悲さと

世の中には、近代的な技術で生み出されたのではないものに対する尊敬とでもいいうるようのものがある。すでに存在しているものすべてに関心を払わない無慈悲さのなかには、いわば不敬といってもいいすぎではないような、なにものかがある。そしてこの考え方は機械的な外観だけを重んじ、想像力や思考力の面からものごとを調べてみようとしないのが特徴である。いかに大きいものであれ、いかに利口なものであれ、その考え方は人間生活に変化をもたらすすべてではありえない。沈思もまた、役割を果たさなければならない。そうすることによって、天空に関する思考から得られる人間の知恵のうち、いくぶんかは、われわれの生活にもっと生かされることになるであろう。しかし、天空をなにかわれわれの手で変化させうるものとしか考えず、宇宙を、人間の関心をもつもののうちもっともつまらないものに堕落させてしまうならば、われわれは単に愚行の領域を広げ、災厄を受けるにふさわしいものになるだけのことである。無慈悲さを押え、尊敬の念を高めることが必要だ。そうなればわれわれの宇宙征服は喜ぶべきものになるだろう。しかしもし欠けるところがあるならば、われわれはその不敬に当然与えらるべき罰を招くことになるだろう。

（ロンドン・タイムズ特約）

---

バートランド･A･ラッセル氏

世界的に有名な英国の哲学者･数学者･平和主義者。第一次大戦以来反戦運動を行い、第二次大戦後は原水爆禁止など精力的な運動をしている。一九五〇年ノーベル文学賞を受賞。九十七歳。

原文
Bertrand Russell
“Why man should keep away from the moon”
*The Times*, July 15, 1969.
“From Earth to Moon”
*Asahi Evening News*, July 22 and 23, 1969.